
BUMP OF CHICKENメドレー～タンポポ編～

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B U M P O F C H I C K E N メドレー／タンポポ編／

【Nコード】

N 6 8 6 2 B

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

B U M P O F C H I C K E N さんの歌詞を小説にさせていただきますました。私なりの解説なので、本来の意味とは異なるかもしれませんが、御了承下さい。なお、歌詞をそのまま使っている文章の前には必ずーが入っています。

ブローグ〜ダンテライオン〜

ハア…ハア…

「警告！警告！

市民のみなさんはただちに非難して下さい。」

ハア…ハア…ハア…

「いたぞ！射撃班は銃の構え」

ハア…ハア…ハア…ハア…

「くそつ、また逃げられたか…」

ハア…ここまで来れば大丈夫だろう…。

でも…なぜ僕は嫌われるんだろう？

僕はただ、みんなと仲良くしたいだけなのに。

人間は僕を見ると奇声を上げる。

なんで…？

あんなに猫は可愛がられているのに。

僕が…ライオンだから…？

くダンデライオンく

――――。

ここサバンナという町は小さいながらも実に豊かな町だった。

追い出されたライオンは自分の居場所を求め、ひたすら歩いた。

すると目の前に一つの大きな橋があった。

『どうせサバンナには居られないんだ。どこか遠い所に行こう』

そう悲しそうにつぶやくライオン。

橋を渡りきったライオンは思わず

『いつになったら僕の居場所が見つかるのかな…』

と、呟いた。

しかし、橋を渡ったその時、目の前にいたのはこの後、ライオンの運命を大きく変えてくれる奴だった。

そいつは小さいながらも――太陽に良く似た姿だった。

『どうせ俺を見て逃げるんだろ…？早く遠くに行けよ』

「……………」

そいつは何も言わなかった。

『――お前は俺が恐くないのか？逃げないでいてくれるのか？』

くコクッく

そいつはー吹き抜ける風と共に一度だけ頷いた。

生まれてから天涯孤独。そんなライオンに初めてできた友達だった。

ライオンは涙が止まらなかった。

温かい涙…いつもの寂しさで流れる冷たい涙とは違う、温かい涙。

涙の理由…？

それはライオンにも分からなかった。

ただー濡れた頬の温かさは…おそらくお前がくれたんだ。

ライオンは何度もそう自分に言い聞かせた。

ライオンはここで何日も日々を過ごした。

しかし、それを良く思わないのがサバンナに住む人間達。

そもそもこの橋はサバンナと隣町を繋ぐ唯一の連絡橋であつたために、人間を襲うかもしれないライオンが橋にいられては、食料の配達もできない。

一人がやつと通れる様な幅の細い吊橋だ。ライオンと出くわしてしまえば勝ち目はない。

困り果てたサバンナの村長は軍にライオンの討伐を依頼した。

討伐決行の日、あいにくの雨だった。風も強く、雲の流れも早い。遠くの空では雷さえも鳴っている。

しかし、そんな事も知らないライオンは友達のためにプレゼントを取りに、朝早くから出かけていた。

ライオンは金色の琥珀をくわえて友達の元へ帰る。

『それにしても、この琥珀は友達によく似た色をしている。あいつは喜んでくれるだろうか？』

早く…早くあいつの喜ぶ顔が見たい。

その一心でライオンは、はしゃぎながら帰り道を走ってきた。

しかし、サバンナの討伐軍に見つかってしまう。

銃口を向けられるライオン。人間達は何のためらいもなく引き金を引くだろう。

『苦勞して見つけて…ここまで来たんだ』

ライオンは銃弾を避けながら帰路を急いだ。

淋しがり屋だが、弱虫ではない。むしろ野性の王とまで言われるライオンに本来の力が戻った。

それに加えて何かの為に頑張る時のパワーは、時に想像を超越する

ものだ。

しかしながらも人間には発達された知恵と道具がある。待ち伏せされていた兵士が投げた剣が、ライオンの背中に命中してしまう。

命からがら、なんとか友達が待つ橋まで逃げてきたが、すでに疲労困憊。

背中に刺さった剣を自力で抜こうと、ライオンは跳びはねた。ライオンがジャンプをする度にその振動が橋を揺らす。

そのせいでバランスを崩したライオンは転んでしまった。しかし、その衝撃で背中から剣が抜ける。元々深い傷ではなかったようだ。ライオンは抜けた剣を大きく蹴飛ばした。その剣は空高く舞っていく。

その時…不運にも雷雲がサバナ地方に流れてきていた。

空高く舞った剣が避雷針となり、一直線に雷が落ちた。

橋は崩れ、ライオンと共に谷底へ落ちてしまった。

—————。

あまりの痛みに目を覚ますライオン。

どれくらい落ちただろうかとふと上を見上げる。

——空は遠く狭くなった。

これはかなりの高さだ。登る事はまず不可能だろう。

あいつはどうしているだろうか…？

心配しているだろうか…？

…でも、あいつを泣かせたくない！

そう考えたライオンは大きな声で鳴いた。

力強く、元気な声で。

――この通り全然平気だぞ！…と。

…しかし、自然と涙が流れた。

冷たい涙。

それもそのはず、ライオンの体は傷だらけである。

…否、決してライオンは傷が痛くて泣いているのではない。

ここは…谷底は孤独だ。

嫌われる人すらいない。

この涙はあいつには生涯分らないだろうな。

いや、知らなくていいんだ。

あいつは俺とは違い愛されている。

『もし生まれ変わるなら…お前の様な姿になれば、愛してもらえるかな?』

雨が止まず、血もいつしよに流れていく。

もはやライオンは死を覚悟した。

もう元気な声など出なかった。

それでもライオンは鳴き続けた。

ただの力弱い声。迫力のない鳴き声。

…でもライオンは別に淋しくなんかなかった。

なぜかって…ただ一度、友達と呼べる奴に出会えたから。初めて自分を相手してくれたから。

『涙の理由が分かった気がしたよ。――この心の温かさがそのまま答えて良さそうだ』

――季節は巡り、春が訪れ、谷底まで金色の化粧。

一面に咲いたタンポポの花はライオンによく似た姿だった。

目をふさいでしまったライオンは、たくさんの友達に囲まれて幸せそうだった。

ブローグ・ダンテライオン（後書き）

読んでいただきありがとうございます。もし苦情があるようなら迷わず削除しますので、評価、感想をお願いします。

第1話〜くだらない唄〜（前書き）

『神に誓うな！己に誓え！』とは、くだらない唄の歌詞には出てきませんが、BUMP OF CHICKENさんのギターボーカル担当の藤原さんの名言とされているので使わせていただきました。

第1話くくだらない唄

『――得意の絵を書いてあげる。僕の右手と、水彩絵の具で』

「え？藤本君、絵書くの得意なの？」

『馬鹿言え！絵かきのモットーとは俺の事さ』

「フッフ、楽しみにしてるよ」

くくだらない唄

俺の名前は藤本^{ふじもと}。モットーなんてあだ名がついているが誰からも呼ばれた事がない。

そして俺の隣にいる子が雪^{ゆき}。年は十九で同い年。正式に付き合っていないが俺は雪が好きだし、雪も俺に…少なくとも好意は寄せているだろう。

こうして丘の上に俺が来ると、どこからともなく現れては、くだらない話をしたりする。

それが凄く楽しいし幸せだ。

でも、明日は成人式。俺達は社会人として認められる日だ。

それと同時に旅立つ。

旅立つって言っても、仕事の為に町を移動するだけだが。

俺は絵かきとして、雪は小さい頃からの夢だった美容師になるため、都会へと引越す。

だから、この幸せな日々も実質、今日までなのだ。

ここ砂盤菜^{サバンナ}の町で育ち、今までの頃が懐かしく感じるんだ。

だから、こういう思い出を忘れたくない。

それで俺はこのタンポポ丘の景色を絵として書き上げる事に決めた。

遠く離れ離れになる雪への華向けの意味も込めて。

そして、俺のこの想いも込めてだ。

雪となら遠距離だって恋愛できると俺は信じているから。

『そうだー指切りをしよう。僕らにシワが増える前に。十年後も同じ日に、またここでいっしょに絵を描こう』

「うん、このタンポポ丘で…ね」

『ー神様！見渡す限りに、綺麗なタンポポを咲かせてくれ！』

「藤本君、神様とか信じるんだね」

『まあな、でもこれだけは言つとくが、神に誓うな！己に誓え！！…どう？俺の名言』

「いいね…神に誓うな！己に誓え…か」

『ああ、だから俺は俺に誓う。ー今夜中にこの景色を僕の右手と絵の具で閉じ込める。十年後の同じ日に、ネクタイで迷わぬように』

なんて話している内にもう日が沈んでしまった。

雪といるといつも時間を忘れてしまう。でもなぜか、絵は一人で描くより上手く描けるような気がするんだ。

月明かりで照らされた雪の横顔に思わず見とれてしまう。

「暗くて見えないでしょ？それに、寒くない？」

季節は冬だ。しかも夜。決して温かいなんて言う奴いないよね。

『大丈夫だよ。見つけやすいようにタンポポを描く事にしたんだから。それに、もうちょっとで完成するから』

え？なんで冬なのにタンポポが咲いているかって？

まあ、これは父さんから聞いた話だが、俺のじいちゃんが若い頃、砂盤菜の兵士だったらしい。

何でも民を困らせたライオンに剣を刺したために英雄になった。…
っていう胡散臭い話だ。

そのライオンは谷底に落ちたらしいんだけど、なぜかライオンを包むように、異常な数のタンポポが咲いたとか。

それ以来この砂盤菜のタンポポは一年中枯れる事がない。春夏秋冬、いつでも咲いている。さすがに冬は咲く数が少ないけどね。

さて、早く仕上げなくちゃな。雪も飽きたのか知んないけど、数少ないタンポポを摘み出したし。

ーっ少しだけ僕は咳をして、最後の一笔に願いを込める。隣であなたは俯いて…タンポポで冠を…。

『この絵には、俺の想いも込めたんだ。完成はまだ見ないでくれ。もし…もし見たいなら…受け取ってくれるなら、明日…ここで待つ』

てるよ』

「うん、分かった」

—————。

『ハッ！すっかり寝ちまった！絵は…まだ途中だ…』

なんて事だ、でもあと少しで完成。時間には充分間に合う。

『…ん？』

頭に何か…これは、冠？ 全部タンポポでできてる。

雪が作ってくれたのか。ありがとな。

本当は、全てが怖いんだ。雪と離れる事も。

——神様、僕は震えてる。背広もネクタイも見たくないよ。Ｔシャツに昨日染み込んだ、タンポポの匂いが忘れられない。

でも、俺に誓ったんだ。

この絵を完成させて、雪に告白して、大人になるって。

だから怖くない。…はずなのに、何で手が震えるんだろう？

筆すら持てないくらい手が、足が…そこまで寒くないのに、震えるんだ。

結局俺は絵を完成させる事ができずに再び夜を迎えた。

分かってるんだ。雪はもう来ないって事ぐらい。

だから――僕はまだ…震えてる。

第2話 くベストピクチャー

ー坂の下の安アパートが僕の家。隣のビルのせいで日が当たらない。

俺は砂盤菜からこの町に引っ越してきて、はや五年。

未だに絵は全く売れない。でも、俺は自分の好きな物を書いている。

自分だけの、オリジナルの…夢を書いてるんだ。

生活は苦しいが、まんざらでもない暮らしをしている。

今日も良い景色がないかな？ と、キャンバスと筆を持って外に出た。

賑やかな町中には様々な格好をした人がいるため、絵かき独特の格好をしてたつて変に思われない。

…まあ、変に思われたつて俺は気にしないがね。

愛着している赤いのベレー帽子に薄茶色の短いコートにズボン。その下にはワイシャツ。

絵の具が着いた汚れも俺にとっては勲章のような物だ。安くてボロい服装だが、それがまた気に入っている。

しかし、今日に限って強い視線を感じた。

その視線の正体は学生服を着た青年が二人。

二人共高校生くらいだろうか。凜々しい顔立ちは頭脳明晰を想像する。

その二人組が俺の方へ近寄ってきた。

「こんにちは、インタビューして良いですか？」

『俺にか…？』

「はい、現代の若者に必要な物のアンケート調査をしているんです。お願いします」

こんな真っ直ぐで素直な子達に頭を下げられたんじゃ、答えない訳にもいかないな。

『いいだろう。なんでも聞いてくれ』

「ありがとうございます。では早速、今の若者をどう思いますか？」

おいおい、俺はまだ二十五だぜ？ そんなに老けてるのかな…。

まあ、良いか。さて、今の若者が。

『ああなるのは…夢がない証拠なんだよ』

俺はそう言つて指を指す。その指先を青年達も追つ。

俺が指さしたのは、こんな平日の昼間なのに、学校も仕事も行かな

いでファーストフード店の前に群れる若者。

赤や紫など、目がチカチカする程変色した髪は、目が隠れる長さ。

明らかに見た目は未成年なのに、タバコを吸っていた。

「…夢、ですか」

『そうだよ。自分が本当に叶えたい夢や守りたい宝物があれば、あんな事してる暇はないし、こんな事してる場合じゃないってなるだろ？』

「なるほど、夢…宝物を持つ…ですか。ありがとうございます！」

『なあに』

俺は青年に背を向け、右手を軽く振って歩き始める。良い景色を見つげるために。

「あ…あの」

だがその足取りは青年の俺を呼び止める一言で止まった。

「あなたの宝物って…何ですか？」

『俺の宝物か？ー電気スタンド・筆・机だ』

『ベストピクチャー』

俺は公園のベンチに座り、ポカポカの陽気に眠気を誘われていた。

さっきの青年達との出会いも運命だろう。

『今日のテーマは夢にするか』

ーこんな家に住み、こんな暮らしがしたいなんて事をキャンバスに塗りたくる。流す涙もタメイキすらも。

絵を描くのが俺の夢だった。それが叶って幸せだ。

ただ、絵を書いていると、やっぱりまだ雪の事を思い出しまうけどな。

『ーねえ、僕ここで生きてるよ。まだ、絵を描いてるよ』

雪は、俺を思い出してくれているかな？

こんな俺を認めてくれるかな？

本日、俺が描き上げた絵はキャンバスの中には家があって俺がいて、雪がいて、タンポポが咲いている絵。

小学生が描きそうな無邪気さを出したつもりだ。

「綺麗な絵ですね」

背後から話しかけてきたのは先ほどの二人の青年だった。

『よう、褒めてくれてありがとうよ』

「あの、前に学校の方でチラシを見たのを思い出したんです。絵の大きなコンクールがあるんですが、それに作品を出品してみたいかがでしょうか？」

『ハハハ、面白そうだな。チラシを見たら…考えてみるかな』

俺は青年の言う事が半信半疑だった。どうせコンクールっていったって小規模な物だろう…と考えていたからだ。

しかし、翌日。再び青年が俺の前に現れ、チラシを渡してきた。

『お…おい、こりゃ…スゲーな』

小規模なんてとんでもない。俺は甘く見ていた。

全国の絵描きが集結し、有名な鑑定士や金持ちのボンボンが顔を出す大会じゃねえか。

出品した作品が気に入られたら一気に絵描きの名前も売れ、富も名誉も手に入る。

正直な所、俺は今の暮らしに飽きていた。そろそろ誰かに俺の作品を認めてもらいたくなっていた所だ。

雪と離れてからと言うものの、町の住民じゃ、芸術を理解しようとならない人がほとんど。

絵を売るところか見てすらもらえない。

でも、コンクールとなれば、結果は別として、とりあえず作品を見
てもらえる。

俺は久しぶりに熱く燃えるものを感じた。

このコンクールに出よう。

『…って、スポンサーがいなけりや駄目なんかい!』

チラシの参加条件の覧にはスポンサー必至と書かれていた。俺にス
ポンサーなんているわけもなく、諦めようとした。

「大丈夫です。うちの高校は美術・芸術の専門学校なんです。先生
に頼めば、スポンサーになってくれますよ。なんて言っただって、ア
ンケートに真面目に答えてくれた唯一の方ですから」

おお、なんと奇跡だ。

『じゃあ、そっちはまかせた。俺は早速だが、作業に取り掛かるか
ら!』

俺は夢中になって、ただひたすら絵を描いた。

上手くは描けている…でも何かが足りない。

『駄目だ!こんなんじゃ駄目だ!……ん?』

そうだ…五年前、雪の華向けとして、想いを込めた砂盤菜でのタン
ポポ丘。

実はあれから未完成のままの絵。大切に保管してあっただけに汚れない。

『これを完成させよう』

俺は自分の全てをキャンバスぶち込んだ。五年前の事だが、あの日の記憶は繊細に残っている。

こうして俺はタンポポ丘の絵を完成させ、作品として出品した。

――。

「優勝は藤本さんのタンポポ丘です!!」

――。

「君の絵は素晴らしい。どうだ？この金で」

――。

「どうだろう？我社と組んで…」

――。

――坂の上のお城みたいな僕の家。雲の上のような日の当たり具合。

「藤本様、作品の出来高が落ちて来ています。もう少しペースを上げなくては…」

『分かってるよ！うるせえな！！』

くそう…なんでこうなったんだ？

俺はいつ間違えたんだ？

あのコンクールから五年。今年でもう三十歳だ。確かに富も名誉も全て手に入れた。

でも、絵が…もう絵が描けない。何を描けば良いんだ？

「藤本君の作品は素晴らしいよ。金になる！藤本が描いたと言うだけで入れ食い状態だ！これからも頑張ってくれたまえよ」

なんでこんな心も込めてない絵が売れるんだよ？

こんな…こんな絵、ただ景色を写しただけじゃないか。

でも…地位と名誉と満足感。無くす事を恐れてひたすら絵を描く。

――

「こんな風にしろと」筆も心も何かに縛られたままキャンバスを埋め尽くす。

俺は生きてるのか？

なんで絵なんか描かなくちゃいけないんだ？

もしこんな姿を雪が見たら、あいつはなんて言うかな？

いや、俺の名前はもはや全国に行き届いているんだ。

雪の耳にも入っているだろう。

生活は苦しかったが、夢を追って絵が宝物だった五年間。

今となつては夢も宝物も無くなった。絵は仕事になっちまった、この五年間。

昔みたいな絵はもう描けない。かと言ってもう戻れない。

戻れないなら…絵を描くのを辞めるしかない。

『ゴメンなあ』

俺は重い腰を上げると一本の筆を取り出し、折ろうとした。

しかし、何か不思議な力に包まれた。

聞こえる…何か聞こえる。

「ー折ろうとした筆がこう言つた気がした。

「ずっと見ていたよ 絵が好きなんだろ？」

なんだ、俺の宝物はまだ生きてるじゃないか。

『ーねえ、僕ここで生きてるよ。まだ絵を描いてるよ』

周りから見たら頭がおかしいと思われるだろう。

なんせ、大の大人が筆に喋りかけているのだから。

「ーここからは何が見えるの？」

でも筆は俺にちゃんと喋りかけてくれるんだ。…俺だけにしか聞けない声で。

『ここから見えるのはねー僕が描かずにいられない景色！』

久しぶりだな。絵を描きたいって思う気持ちは。

俺はワクワクしていた。今ならきつと良い絵が描ける気がする。

押し入れの中から引っ張り出した物は、五年前に俺が愛着していた服とベレー帽子。

こいつらの存在も忘れる所だったぜ。

いつそのこと、あの頃と同じようになればいいじゃないか。

筆は何本も持っていなかった。

キャンバスはこんなに大きくない。

ボロボロの服に、毛先が乱れた筆に、小さなキャンバス。

でも、これが俺の宝物。

夢だった 絵描き は仕事に変わったけど、宝物は変わらないのさ。
「そんな格好して外出はさせません！人に見られたらどうするんですか！？」

変わったのは周りの目。

今の俺はこの格好で外出する事を担当者は許してくれなかった。

「それと、外出の際には車の手配をするので一言声をかけて下さいと言いましたよね！？」

もう…うんざりだ。

確かに楽に好きな場所へ移動できるにこした事はないが…。

…あ、また筆が…

「…ねえほら見てくれよ！生きてるんだよ？だって、絵を描いてるんだぜ！？」

そうだったな。俺は 生きてる んだよな。

なあ、雪。…あなたにも見えるでしょう？

ベストピクチャー

ベストピクチャー。

『俺のベストピクチャーは、世界の為でも自分の為にでも描いたんじゃない。たった一人に見てもらいたくて描いたんだ』

「こ、こら！藤本君！！タンポポ丘は一番の目玉商品なんだぞ！！？
今更、返せと言うのかね？」

『この絵は俺の全てだ』

「ま…待ちたまえ！」

全く、見失う所だった…。そして大切な事を忘れる所だった。

俺は見世物にされてた絵を持ち出して、この城を飛び出した。

第3話　続・くだらない唄

――湖の見えるタンポポ丘の桜の木の下で、下ろしたてのコートのポケットに手を入れて、数年前にもこの場所で同じポーズしていた事。思い出してやっと思感

「僕は帰ってきた」

そう、今俺が見ているこの景色。俺が持っている絵と同じ景色だ。

まあ俺が描いたんだから当たり前か…と自画自賛してふくみ笑いをする。

この絵を描き始めたのが十年前だった。

十年前…俺と雪が別々の道を歩み始めた日でもある。

続・くだらない唄

『ただいま』

「おう、藤本じゃねえか！おかえり！！」

この人は元気^{げんき}さん。俺はゲンさんと呼んでいる。歳は四十近いらしい。ごつつい顔に武将ヒゲが似合うダンディーな人だ。

ゲンさんは施設に預けられた子供達の面倒を見ている。顔に似合わず優しい人なのだ。

「おめえはいつもそうだな。急に消えては、また急に現れる」

『ハハハ、絵かきは自由なもんですから』

「十年たっても変わらねえか！」

そう、俺もかつてこの施設に預けられていた身。

理由は両親の早い死だ。

親戚をたらい回しにされた時にゲンさんが俺を拾ってくれた。

全く、この人には感謝しきれないぜ。

「藤本よ、都会はどうだったい？」

『怖かったけど、面白かったよ。俺の――小さなそのプライドを見せてやるうとした』

絵を描きまくったんだ。ちょっと道を間違いちまったが、それが間違いだと気付いただけでも、俺は都会へ行けた事を成功と思っている。

「そいつあ良かった……ところで藤本よ」

ここでゲンさんの声のトーンが低くなる。

その原因はおそらく…

「いつになったら…返す気だ？」

…やはりな。

「俺だつてホントはこんな事言いたくねえよ？ただ、額が額だ。それに絵かきとしても五年間売れたんだ。そろそろいいんじゃないか？」

そう、俺は都会に行く時に資金としてゲンさんに金を借りた。

そもそもゲンは金貸しだ。法外な金利を付けている。

それも、この施設で捨てられた子供達を養うためには致し方ない事だろう。

そんな優しいゲンさんだ。今までの恩もある。だからこそあえて俺はゲンさんに借りたんだ。

もう引き返せない。

絶対に成功する。

若さゆえの世間知らずの無茶ぶりだったかもしれない。

『すまねえ、ゲンさん。今手持ちはないが、この口座にピッタリ入ってるからさ』

俺は借りた分の金の口座を作っていた。それを暗証番号が書かれた紙と共にゲンさんに渡した。

確かに金利は辛いけど… 絵描きのあの時、成功したからには問題ない。

「おう、良かった良かった。おめえも雪と同じにはなりたくねえだろうからな」

……………は？

今…何て……………？

『ゲ、ゲンさん？雪を…まさか、あんた！』

「ああ、雪はおめえと違って失敗した。借金は最初に貸した額が返ってくるどころか増える一方。あれからちょうど十年だ。雪が年食う前にも思ってた…」

そこからゲンさんは面白おかしく何か話していたが、俺には何も聞こえてこなかった。

信じられない…雪が…『REM』に売られたなんて…。

REMとは、いかなる手段を使っても借金を取り立てる組織である。

裏名…殺人鬼。

ゲンさんがその組織と絡んでいる事は知っていたが、何せ相手は他人だったがために、施設の子供達の為に金を回収するゲンさんをど

こか応援していた。

そう、俺はREMとゲンさんを応援していた…。

だが、雪となれば話は別。都合の良い奴だと自分でも思う。

『何でだよ！！何で雪を売ったりした！！！！』

俺はもちろんブチ切れた。この際、恩人のゲンさんだろうと関係ない。

「勘違いするなよ藤本！！おめえは成功した。つまり勝ったんだ。雪は失敗した。…すなわち負けだ。そんな雪がこれからも借り続けたら生涯働いても返せない額になる。だから今のうちにとっと思ってない」
不気味に笑うゲンさん。

「まあ雪はベツピンさんだからな、すぐに買い取り手も見つかるだろう」

やはり雪は売られたんだ。予想していた最悪の展開。

『何でだよ…あんたみたいに良い人が…あんなに親代わりに面倒みてくれていた…ゲンさんが…』

「ガーハツハツハツハツ」

ここでゲンさんが大笑いした。歯並びの悪い口を大きく開け、人を

本気で馬鹿にするような笑い方だ。

「雪の話を聞いてもまだ気付かないなんて本当に馬鹿な奴だ」

ああ、そうか…。

「何で俺が子供の面倒を見てるかだど？そんなの決まってるじゃねえか！金のためだよ！！」

俺達は騙されていたんだ。

「この施設を出る時は絶対軍資金が必要だろ？法外な金利でもお前らは世話になってるから断れねえ！」

俺がガキの頃から見てる…金を返しに来る人も、昔はここに預けられていたんだ。

「成功しても返ってくる。失敗したら売られる。どっちにしても、俺の元には莫大な金が転がり込むのさ！！」

この施設に預けられた時から…運命は決まっている。通りでゲンさんが子供を引き取るわけだ。

「なのにお前らときたら…俺を《良い人》だつてよ！ガーハツハツハツ！！」

『もついい…俺は帰る』

「おうよ！毎度、ありがとうございました！なーんてな。ガハハハ」
ゲンさんと施設の真実。
それは信じられない裏切りだった。

裏切り？ いや、俺達は育てられていた…良い金づるに。

放心状態…まさにそうだ。気力もなくなってしまった俺は、自然とこの場所にいた。

――湖の見えるタンポポ丘の桜の木の下で、手頃なヒモと、手頃な台を都合良く見つけた。
半分ジョークでセッティングしてそこに立ってみた時、漫画みたいな量の涙が溢れてきた。

『ううあ…うわああ！！』

駄目だ！ 死んじゃ駄目！
終わっちまう。

俺の人生が終わっちまうよ。そんなのは嫌だ。

嫌だ…もう何もかもが嫌だ！

泣いていたって何も変わらないのは分かっている。だが止まらない。

――数年前にもこの場所でよくこっそり泣いたっけ。あの子にフラれただとか、軽いもんだっただけ。

今はその雪もない。何をしているかも分からない。

もしかしたら…想像は悪い方向へと向かうばかりだ。

『俺は…ちゃんと帰って…きた…よ…?』

かすれた声で発した言葉も、本当なら感動の涙が流れているはずなのに…。

『この景色も…あれ?』

驚くのも無理はない。

目に見えるもの全てが白黒…つまり、色がついていない。

花も、木も、草も、空も…白黒だ。

『もう…皆死んじゃったのかい?』

絶望に魅入られたその時…何かが光った。

暖かい光…暗闇に差し込む一条の光とは、まさにこのこと。

光の正体は、俺が書いたタンポポ丘の景色。

『そうだね、この花はタンポポ。見つけやすいように…黄色なんだね』

白黒だったタンポポが黄色に染まる。

するとそれを中心に―景色に色がつく。

俺は生を取り戻した。

まだ生きてる。この絵のおかげで実感できた。

『そうさ、一年中タンポポが咲いてる砂盤菜。ここで俺は生まれ育った。まだ生きてる！！』

――この眼がかろうじて、飛んでいく綿毛を見送った。

また新たな命が生まれようとしているんだ。

必死で生きようと咲くんだ。

なのに生きてる奴が、自分から死のうとしちゃ駄目なんだ。

『何としても雪を助けよう』

ありがとう、タンポポ。

そしてタンポポ丘。

絵を描いていて良かったって本気で思うぜ。

――この眼がギリギリで見えていて良かった。

向かう先は一つ、REMの裏取引会場だ！

第4話〜太陽〜（前書き）

今回は雪視点です。

第4話　太陽

――二度と朝には出会わない。窓の無い部屋に動物が一匹。

ここはどこだろう…？

真っ暗だ…私…どうなるんだろう…？

太陽

道を歩くだけでガヤガヤと煩い話声。都会とはここまで人が多いの

か。

『絶対音感』…それを持つ人は、都会での音が全て雑音に聞こえる
と聞いた事がある。

そんな場所に私は来た。

田舎からはるばる来たのは美容師になるためだ。

ゲンさんから借りたお金。景気良く多めに貸してくれた事が心温かい。

まだ余裕がある。

金銭的にも…それは精神的にも繋がる。

唯一の心残りと言えば…藤本君の事かな。

私も彼が好きだった。でも、これから都会に出てくる新人の身。彼の事ばかり想っていたら私自身が成長しないと思った。

もし…もしもう少し経って許されると言うなら…次は…私から言おう…。

そうこう考えている間に今の勤め先、美容室、アルエに着いた。

『おはようございまーす！』

「おう、おはよう！」

この人は店長さん。歳は四十近いと聞くが、もっと若く見える。無

理のない落ち着いた茶髪で、長さは短め。普通にオシャレだと思う。

「あら、雪ちゃん。今日も元気ね」

この人は店長さんの奥さん。この人もまたオシャレ。そして美しい。

「ニヤアア」

「フフ、ニコルはまだ眠いみたいね」

ニコルとはこのアルエで飼っている猫の事だ。真っ白な毛で黒い瞳。そして店長さんの案らしく、いつも赤いマフラーを首に巻いている。とにかく可愛い。

『はいはい、そろそろ奥の休憩室に行きましょうね』

私はニコルを抱えて、着替えるために休憩室に向かった。

ここの美容室は二階で、一階はこの夫婦さんの家。

あと一人従業員がいて、総員4人で営業する小さな店だ。

正直な話、最初は私はこの店で働くのが嫌だった。

わざわざ都会に出てきてなんでこんな小さな店なんだって…もっと大きな店で働きたいって…そんな不満が満ち溢れていた。

二年間、美容学校に通い、上位の成績を修めた私が推薦された店。

しかし、勤めてみれば最初の不満を謝罪したくなるほど。

この店長さんは実にテクニクが巧み。それもそのはず。昔、その美容が外国からも認められ、海外までその知識を講師しにいったらしい。

そして三年前に日本に戻ってきて、大型店を建ててくれると言われた所を、あえて拒否。

「自分の家の二階を美容室にしてくれ」

富と名誉を受け入れなかった店長さん。

だからこの人のテクニクを知っている人はほんの一部。

…だったが、噂が広がり今や隠れた名店となっている。

その証拠に、アルエは完全予約制度で、一日中お客さんが絶えない。

優しい夫婦に、確かな実力。まさに良い人。私の都会生活はまさに充実していた。

新米の美容師は当たり前だが、かなりの修業と月日が経たなくてはお客さんの髪を切らせてもらえない。

ここに勤めて三年経つが、今だにシャンプーや会計、準備くらいしかさせてもらえないが仕方ない。

さらにコツコツと練習も重ね、二年の月日が経った。

――――。

五年間、私が都会に出てきてまだ元気にやっている時だ。

店の入口に新しい絵が飾ってあった。

『店長さん、この絵…綺麗ですね』

「だろ？俺は風景画が好きだから買ったよ。確か…作画が…藤本って言ったかな…？」

え…？

この絵…藤本君が描いたの？ そうか、彼も頑張ってるんだ。よし！ 私も頑張ろう！

「そうだ、そろそろ雪ちゃんも実戦しても良い頃だな。…今日、お客さんの髪、切ってみるか？」

『え…？あ、はい！やらせてください！！』

嬉しい…その反面、緊張する。

気が気でならない…でも、藤本君は成功したんだ。

今日が、私のスタート第一歩。五年間積み重ねた努力の披露宴。

とにかく…やるしかない。

ちょうど12時、予約を入れた婦人が来店する。時間ピッタリだ。

『い…いらつしゃいまへ』

…噛んだ…。

「緊張しないで、大丈夫だからね」

ポンと肩に手を置かれ、集中させる。

「実は、今日この子は初めての实战なのですが、宜しいでしょうか？」

店長さんが婦人に交渉を持ち掛ける。

「あら、初めてなの？でも、構わないわ。いつもあなたが頑張ってる姿見てるもの」

こうして、私は了解を得て、髪を切らせてもらう事を許可された。

「……しかし……」

「キヤアアアア！！」

「お客様！おい、救急車だ！」

「は……はい！」

…私は誤って、ハサミを落としそうになってしまった。

美容に使うハサミは一度床に落とすと刃がわずかに変形してしまうので、二度と使えなくなる。

それを庇おうと…焦ってしまい…

婦人の耳を…切ってしまった…。

医師に見てもらった結果、軟骨切断。

もちろん私は…クビだ。

――――。

そうだ、そんな事があったんだ。

あんな新聞にも乗るような事をしてしまった私を雇ってくれる美容室などなく、ゲンさんに借金も返せず、REMと言う金融グループに捕まり、拉致られたんだった。

なんとかここから抜け出さなくちゃ…何をされるか分かったもんじやない。

とりあえず辺りを見回すが、暗くてよく見えない。

薄い明かりの電球が吊り下げてあり、毛布がわりの布、何が入っているか分からない木箱。たったそれだけ。

壁を手探りで一周回り、ドアを捜す。…あった。

…しかし、ードアノブが壊れかけていて触れたら最後、取れてしまいそうだ。

ドアノブが取れてしまえば、窓もない部屋だ。もはや出られる術を

なくす。

私の行動は封じられた。

しかし、寒い季節は冬だ。そんな中、薄くボロい布なんかで、寒さを凌げる訳がない。

でも、ーこのくらい寒い方がいい。本当の震えに気付かないで済む。

…あの木箱は何が入っているのだろうか。ジッとしていても仕方ない。不安だが、勇気を振り絞って開けてみた。

中には…缶詰…？

それと缶切りもある。

開けてみると、食料だ。食べられそう。

考えてみれば、閉じ込められて、結構経つと思うが、何も口にしていない。

缶パンと缶シーチキン…おいしくはないが、腹の足しにはなった。

常に真っ暗、時計もないためにどのくらい時間が経ったかも分からない。

携帯も圏外だし、充電も切れれば時間も分からない…ただの荷物。

腹が減れば缶詰を食べ、眠くなれば寝る。起きたい時に起きる。

――不愉快も不自由もない。その逆も初めからない。

いつまでこうしていれば…

そう思った時、ドアが開いた。外は薄暗い。今は夕方らしい。

黒いスーツを着た体格の良い男が数人。

そして眼鏡を掛け、いかにも頭の良さそうな人が二人。

一人は人相が悪く、もう一人は歳も若く、好青年の印象。

そして最後に、ボスであろう老人が入ってきた。

「…おい」

老人の声とともに、眼鏡の人と青年が、私の前に立った。

手にはシャーペンとメモ帳を持っていた。

「いいか、こうやって判別するんだ。――例えば…笑ってみるよ!」

老人に杖で頬を刺され、私は仕方なく笑ってみた。

「肌のツヤは落ちているが、素質自体は悪くない。両頬にえくぼ。元美容師だけあって服装、髪型もキチンと正せばオシャレだろう…
おい!分かったか!ちゃんと書け!」

「は…はい。すみません」

眼鏡の人が大声を張り上げ青年を殴った。

それにしても今のは…？

私はチェックされていたのだろうか。

「よし、今日は顔を見たかっただけだ。おい、ちゃんと保存しとけよ」

「はい！」

そう言い残し、皆は帰って行った。一体何だったのだろうか…？

そして次の日から毎日の様にそいつらはやってきた。

しかし、老人を除いてだ。

これは私の推測だが、私はきっと売られる。老人は去る間際、私を『保存』しておけと言っていた。

もはや人として見られていない証拠だ。

チェックをされているのは私にいかほどの値がつくかだろう。

だから老人…つまり会長は来なく、後は部下にまかせているのだ。

チェックも徐々に厳しくなってきた。泣けと言われ、泣いた時には連中は笑っていた。

値が決まったのだろうか。いずれにせよ、売られるのも近い。

女の勘がこのままじゃマズイと訴えている。

何とか抜け出さなくては…。

唯一ドアが開く時、常外は夕方。時間が決まってにいるのだろう。

現在の時刻は分からない。私は連中が部屋を出た後、すぐに木箱の中に隠れた。

ここに隠れて…何とか隙を見て逃げ出せれば…そう考えたのだ。

ーかくれんぼしてた。日が暮れてった。

見つからないまま、暗くなっちゃった。

皆、帰ってった。

よし、後は次に奴らが来るのをここで待って…

くガチャく

え…！？ 誰か来た？

足音は…一人だ。私を探してる。

今しかない…今しかない…今しかない！！

ガタン！

私は勢いよく木箱から飛び出すと、そいつに缶詰を投げ付けた。

ガシャン！！

よし、懐中電灯に命中。それはもう役目を失った。

外は暗い。明かりなしなら逃げ切れる可能性が高くなった。

倒れかけた男は青年だった。私に何かを言いかけていたが、逃げる事に夢中な私に声が届くはずもなく、私は部屋を出ようとした。

しかし、部屋を出た時に…見つかった…。黒のベンツが数台…ライトを当てられた。

車のライト…久しぶりに見た光だった。そして機械の熱だから嫌な暖かさを感じる。それが逆に…暖かくて寒気がした。

もう待つてはくれなかった。その場で強制拉致。

手足の自由を奪われ、車の中に連れ込まれた。

隣には、さっきの青年。同じく手足を縄で縛られている。

「お嬢ちゃん、残念だったな。せつかくそいつは君を助けに行ったと言つのに…自ら逃げ道を詰んじまうとは」

…え？ ど…どうゆう意味？ 私を…助けに…？

「そいつは新人でね、騙されてこの職に就いたんだよ。犯罪はしたくないと言ったところかな？まあ、そいつがいないのに気付いて、まさかと思ってここに来てみたら案の定さ」

あ…言葉が見つからない…。おそらく組織を裏切ったこの青年も、ただでは済まされないだろう。申し訳ない事をした。

…君のライトを壊してしまった。

私は…この青年の未来…光を壊してしまったのだ。

――それが過ちだと、すぐに理解した。

でももう遅い。彼にとっても…私にとっても。

かくれんぼしてた私を探しに来てくれていたのに。

これから私はどこに連れていかれるんだろう？

一つ、はっきりと言える事は…この部屋から――出れたら最後、もう戻れやしない。

最終話　Everlasting lie

――砂の上で錆びたシャベルを持って、まるで戦うように夢を掘る人。

いつしか地元の人からそう呼ばれるようになった。

暑い日も、寒い日も、毎日休む事なく、何かに取り付かれたかのように、必死で…必死で掘り続ける。

…え？　なぜ掘ってるかって…？

（everlasting lie）

「兄さん、寄ってくかい？この薬…初めは安くしとくよ？」

『人を探しているだけだ…』

全く…ここは腐っている。

人と人が欲を出し合い

…と言っても売る側が有利になっているんだが。

俺は今、裏のルートでしか通じない闇取引会場 REM に来ていた。

目当ては金でも物でもない。

人を…愛している人を探している。

昨日、ようやくこの場所に連れて来られていたと聞き付けやってきたのだ。

「さあ、本日のメインイベント 人間オークションが始まるよ」急いだ急いだあゝ！」

ドスの聞いた声で呼び込みをしているガラの悪い男。

俺はここぞとばかりにそのオークション会場に足を踏み入れた。

「ようこそいらつしゃい。さあ、少々値は張るが、こいつはかなりの上玉だ

『生まれた時から天涯孤独！毎晩淋しいの…』 買っちまえば夜な夜なウハウハだ♪」

まるで園児が見るような戦体ヒーローのナレーションみたいな声で場を盛り上げる司会者。

そして両手に手錠をかけられ、体格の良いガードマンに連れてこられる女の子。

『ゆ…雪…！』

しかし、俺の声は会場の歓喜とも言える野次に掻き消された。

あの売り物にされている子こそ、目的の人物。

借金に追われる身で金融屋のヤバイ連中に拉致されてしまった。

俺が今あの子を買い取る！

それが俺が考えた最善の手段だった。

そしてまた幸せな日々を暮らす。

しかし、その考えは法外な値段を目の前に簡単に崩れ去った。

話を聞けば、何度もオークションをスルーされていた。

…と言うのも、雪の借金が多すぎて値段が高すぎ、買い取り手がな

かなか見つからないのだ。

ここ数力月は売られないだろう。

俺は会場を飛び出し、すぐさま金融屋に金を借りに行った。

「お客様、ご職業の方は？」

『絵かきの藤本って知らないか？』

「え！？あの有名な…？しかし、今は絵を描くのは辞めたと聞きました…？」

『辞めたよ。仕事は後からまた始めるつもりだ』

「残念ですが、そのような不確定な収入の方にはこちらが精一杯でございます」

結局借りられたのはたった三万円…。

その後も片っ端の金融屋を駆けずり回った。

しかし、どこも同じ様な事を言われ、今ある現金は五十二万円…。

まだまだ足りないどころじゃない。

次に知り合いの全てに当たった…

が、そう簡単に貸してくれるわけがなかった。

『なあ、金が必要なんだ！十万…いや、五万でいい！必ず返す！お願いだ！…！』

「無理だ。それに…みんなからそんな金を借りたってお前の借金が増えるだけだぞ？」

『頼む…！貸してくれ…！』

「ってかよお、タンポポ丘を売った金はどうした？」

この絵を売って雪が助かるなら、それが最速の策だろう。

しかし、城も飛び出したからには、あっさりと乗とられ、今となっては帰る家もない風来坊。

さらに追い打ちをかけるように以前タンポポ丘が飾られていたスペースにダミーのタンポポ丘が飾られていた。

俺の財産を使い、鑑定氏の口を封じたのだろう。

もし俺がこの絵が本物だと持ち掛けても、そんなのは権力で押さえ込まれるのがオチだろう。

『えっと…その…』

「そんなに金が欲しいなら、――石油でも掘るしかないんじゃないの？」

ガハハと笑う知り合い。

俺はそんなー皮肉を本気にして飛び出した。

(…そうか、石油か)

俺はシャベルを持ち出して海に来た。

そう…そんな事があつたんだっとな…。

でも…こうして毎日掘っているが、ー掘り出したのは長い年月。

何も出てきやしなかった。

『ゲンさんは…ー人の命を動かして大層楽しいだろうな…。笑えよ、見てるんだろ？この俺がジタバタもがいているのを…』

俺はそう呟いた。俺には力がなかった。

ゲンさんには人を支配する力があつた。

ただ…それだけの事だ…。

悔しい話じゃないか…。

やっぱり雪を救いたい！

俺は再び闇商売の場所へ足を踏み入れた。

あれから長い月日が経っていたが、まだ売られていない事を信じていた。

『おい！この前オークションにかけられていた子はどうした！？』

俺は以前司会者を担当していた男を見つけると怒鳴るように問い掛けた。

「あんた、いきなり何なんだよ！あの子ならもう売れちまったよ！」

くドクンく

…え？

売れた…？

心臓がうるさい。

「ありやきつと大金持ちだぜ？確か…石油王とか言ってたな。」

まあ、これであの譲ちゃんの借金も返ってきたし……」

石油王……？

嘘だろ……？

くガッく

俺は司会者の胸倉をつかんだ。

『そいつらはどこ行つた？』

「離せよ！タダで教えるわけねえだろ」

こいつら……トコトン腐ってやがる……。

『これでどうだ！』

俺は前に金融屋から借りた金を全部払った。

「おお！こんなに

あいつらはこの町に住んでるぜ。住所は…」

俺は司会者から住所を聞き出すと勢いよく飛び出した。

俺は住所通りの場所へ来た。ここでは、男は金を、女は体を…。

死んだ街…そう表現するのが正しいだろう。

本当にこんな所に雪は連れて来られたのだろうか。

「ほら、こつちだ」

人気の少ない裏道で、男が女をホテルに連れ込もうとしていた。

――死んだ街で夜のドレスまとして、作り話のような愛を売らされる人。

『…ゆ、雪！！』

そこで見たものは…雪がドレスを着て、裕福な格好をした男といっしょにいた。

「なんだあゝ？その目は？高い金払ったんだからよあゝ。いい加減

あきらめろな。誰も助けになんか来ねえんだからよ！」

裕福な格好の男が脅し気味で彼女に言い放った。

でも雪は、男の――胸に腕に、身を任せても心はただ一人を待つ。

そんな気……雪からのSOS。助けを求めている。

俺を頼っている。今は俺しかない。

それはただの勘違いだったのかもしれないが、気がつく俺の体が先に動いていた。

『……おい』

俺は男と彼女の前に立ちはだかった。

今の俺にこんな事をする権利がないのは分かっている。

でもジツとしていられず行動に移っていた。

『彼女は俺の物だ……！手を出すな』

俺は男を睨み付けた。

「はあ……いきなりなんだお前は！

こいつは俺が買ったんだ

だから俺のだ」

彼女についた値段をこいつが買った。

俺は買えなかった。

だから彼女はこいつの物だ。

分かってんだよ…そんな事ぐらい…！！

『うるせえ…！』

俺は殴りかかろうとした。

「待つて！」

彼女の声が俺の拳を止めた。

「――二人は大丈夫。明日を信じて待つていて」

そう言つと彼女は男と共にホテルへと入って行つてしまった。

男は俺を睨み付け舌打ちをしていたから、相当頭にきてたのだろう。

しかし俺は何と情けない。暴力で解決できると思つていたのか？

カーッと熱くなり、つい情だけで動いちまったようだ。

夜風に当たり、頭を冷やす。

『明日を信じて待つていろ…だと？』

相変わらず無茶しやがって。死んだ魚の目みたいに光を失つた瞳で

よく言っぜ。

そんな言葉ー信じられる要素なんてどこにあるの？ って、思いながらも、その言葉をおまじないのように呟き続けた長い年月。

あの優しい嘘を想って。

ー運命より、互いを信じていた。

金があれば救える…。

今日も俺は石油を掘り当てる為に海に来ている。

長〜い月日が経った…。

身が凍るような日も

身が焼かれそうな日も

もう何回迎えたっけかな？

――――。

ーとある街の小さな教会で優しい長生きおばあさんが眠りについた。

「雪ばあちゃん!…うわあーん!」

「雪や…長生きしたのう…藤本は今日来ないのか?」

「ああ、あいつはまだ掘り続けてるよ」

「馬鹿な男じゃのう。雪の最期の笑顔くらい、見ておけば良いものを…」

「そうじゃな…。雪はーろくに動けなくなつてからも毎朝何かを呟いて微笑んだ。
きつと藤本を待っていたんじゃろ…」

――――。

ヨボヨボになつた俺の手には折れたシャベルが握られている。

そして今日も穴を掘り続ける。

…あれ?

なんで俺は穴を掘っていたんだっけ…？

この長い年月… 大事な何かを待たせていたような…。

いや、そんな事よりも早く掘らなきゃ… 掘らなきゃ… 掘らなきゃ…。

最終話 Everlasting lie (後書き)

完結しました。なんか最後微妙な終わり方ですいません。これは私なりの解釈なので、本当の意味とは異なる部分もあると思いますが、大目に見てやって下さい。BUMPが大好きで、歌詞を小説にできそうかな...と思ってこの小説を書き始めました。短編ではなく連載をしたいと思い、歌詞中にタンポポが出てくる唄を繋げてみたんですが、いかがでしたでしょうか。「太陽」と「Everlasting lie」には出てきませんが、私自身、この歌詞が気に入っているので書かせていただきました。長くなりましたが、今までお付き合いいただき、感謝してます。ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6862b/>

BUMP OF CHICKENメドレー～タンポポ編～

2010年10月12日01時18分発行